
名無き世界と未知の世界（仮）？

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無き世界と未知の世界（仮）？

【Nコード】

N3814T

【作者名】

元号四年

【あらすじ】

俺が葉盟学院に編入して数週間、ようやく落ち着いてきたところに学院に二人の来訪者が。なんでも俺の闇の魔力に興味を持ったお（ネタバレになるので自主規制）らしく、俺の平和はいつになってもやっつきそうにない。

なんだか夏の暑さにやられたのか他の女の子たちもやたら積極的で いろいろ気苦労が絶えない今日この頃だ。

一章 一部

七月。蝉の音が忙しく聞こえる季節になり、俺は人生最大の危機に瀕^{ひん}していた。

「はい、それでは先月から言っていたとおり、今日の体育は水泳を行います」

迂闊^{きこ}だった。

水泳の授業、それは俺にとっての鬼門^{きもん}に等しい。なぜなら、よりもよって俺はカナヅチだからだ。

俺の通う国立葉盟学院には、アミューズメントエリアと呼ばれる場所に巨大なプールが存在する。学院の土地の外には基本的に外出禁止のため、土地の中に必要最低限（を遥かに超える）のシヨッピング施設に、ゲームセンターを始めとする娯楽施設まである。

学院の外に外出禁止というのにも理由がある。それは、この学院が俄かには信じがたい「魔法学校」だということだ。

俺も最初の頃は信じていなかったが、この学院に編入してから早三週間。いい加減慣れた。というか、慣れでもしないとやっていけない。

そんなこんなで、俺も魔法が使えるようになったのだが……詳しくいことは前巻を参照してほしい。

で、カナヅチな俺は今、楽しそうに騒いでいる同級生の声をBG Mに暗澹^{あんたん}とした気分できているというわけだ。

「どうしてよりによって水泳なんて……」

一応高等部の敷地内にもプールはあるが、そこならまだフケることとできた。しかも、今日は朝からアミューズメントエリアに学年全部で行くことになっていたので、前もって逃げ出すことは出来ていたはずだった。

だが、出来なかった理由があった。それは、俺の隣に立つ水着姿の幼馴染の存在だ。

髪型は栗色の髪を頭の後ろで括り上げたポニーテールで、身長は百六十センチ中ほど。純粋な日本人の割にはスタイルはよく、顔も鼻^{ひなめ}目無しに可愛い。それが、俺の幼馴染の一人、姫城^{ひめじょう}愛華だ。

愛華は俺が小学五年生の時に転校していったから再会したのは実に六年ぶりだ。愛華とは家が隣同士で小さい頃から一緒に遊ぶことや一緒に過ごすことが多かったため、かなりのレベルで仲が良い。俺も愛華には好意を抱いてるから一緒にいるとなんとなく気分が良いんだけど、俺が小学生の頃はそんなことはまったく考えていなかった。

じゃあ何を考えていたのかというと、俺は小学生の頃、地元の人たちに「歩く昆虫、植物図鑑」と言われていた。野草や薬草などについての知識は半端じゃなく、少し前まで小学生の間で流行っていた「甲虫王者ムシキング」というものが俺の小学生時代に存在していたら俺はそれに物凄くハマっていただろう。

そのぐらい、俺は植物や虫のことしか考えていなかった。

まあ、それはともかく。

今回は一応学校行事ということで、ここにいる生徒は全員学校指定の水着を着ている。男はピッチピチのブーメランパンツ（現存してたのか……）で、女子は一般的なスクール水着を着ている。

ただし、葉盟学院に通う生徒の半分ぐらいは外国出身の人が多く、ため、欧米出身の人たちのスクール水着はある意味反則だと思う。なんだよあのスタイルの良さ。俺が純情だったら鼻血大量噴出で放送禁止になるぞ。

ちなみに、さっき俺のもう一人の幼馴染が愛華のスク水姿を見て大量出血で近くにある医務室へと運ばれていった。あの出血量は本当にショック死してもおかしくないぐらいの量だったが、あいつなら死にはしないはず。

俺はカナヅチだが、それでも波打ち際やプールサイドにいるぐらいなら特に問題は無い。が、さっきもう一人の幼馴染に流れるプールに蹴り落とされた際、リアルで「犬神家の一族」のワンシーンを

再現する羽目になったのは今年最高のトラウマを発生させる出来事だった。大和の救助がもう少し遅かったら俺は今ここにはいないだろう。

大和というのは俺のルームメイトで、今は水深十メートルもある超巨大プールで悠々と泳いでいる。昨日準備をした時、泳ぐのが楽しみたいなことを言っただけだから今日は開園と同時に駆けていった。

普段から大人びている大和だが、あの瞬間だけは普通の高校生と同じように見えたのは俺の気のせいでは無いだろう。

閑話休題。

俺が今いるのはプールの入り口。生徒は一旦全員集合するはずなのだが、現時点でここにいるのは俺と愛華を含めた二百人足らずだ。葉盟学院の高等部は二年だけで六千人近くいる。つまり、五千八百人は気分が高揚して走り出して行ってしまったというわけだ。

実際、ここにいるのは宗教的な理由で肌を晒せない人と、理由あって泳げない人（俺みたいな）、それと各クラスの委員長だけだ。

愛華は普通に泳げるのだが、俺がカナヅチで自分が泳ぎに行くと俺が一人になってしまふことを危惧してここに残っているのだ。俺はそんな事気にしないと何度も言ったのだが、頑なに拒否してここに居残っているというわけだ。

「それにしても、どうして泳げなくなっちゃったの？」

これからどうするかを真剣に考えていると、愛華が唐突にそんなことを聞いてきた。

ここで一つ訂正があるが、俺は本当はカナヅチじゃない。ただ、中学時代に発生したトラウマのせいで水に入るのが凄まじく怖くなっているだけだ。ただ、周りの人間にはカナヅチだと言ったほうが早く理解を得られるため、普段からそう言うことにしている。

中学一年の夏、俺は地元の友人数名と海に行った。

俺が住んでいたのは海から離れた比較的内陸部のほうだったが、自転車を一時間もこげば着くような距離だったから友人達と海に行

くことを企画したのだった。

そして、それが悲劇の始まりだった。

海に着いた俺らは軽く準備運動を済ませ、思い思いに海に飛び込んだ。その時には何とも無かったが、悲劇は昼食を食べた後に起きた。

俺らは誰が一番遠くまで行けるかという度胸試し的なことをやった。その海は遠浅だったため、浜から百メートルほど離れても足が着くような深さ（その頃の俺は身長がかなり低かったため、俺一人だけ足が着かなかつた）のままだった。

そこで俺は油断した。

他の友人がそろそろ戻るかと言い始めたのを、俺がもっと遠くまで行こうと言い出し、最終的に俺一人だけ沖に出たのだった。

そこからは思い出すのも恐ろしい、悲劇の幕開け。

突然の離岸流りがんりゅうで俺の体は思いつきり沖のほうに流され、巨大なエチゼンクラゲの大群に囲まれて体中を刺され、意識が混濁こんだくしてる中で足にカサゴのようなものがぶつかり、足を中心に這はい上がってくる激痛に耐えながらなんとか浜を指していたのだが結局届かず、俺の体はそのまま海に沈んでいった。

そして目が覚めたのは病院のベッドの上。医者の話では、体中をクラゲに刺されていつ死んでもおかしくない状況だったらしい。そんな中で後遺症も残らず意識が戻ったのは、奇跡を通り越して何か神がかり的なものが働いたとしか思えないようなことだったらしいがそこから辺のことはよく覚えていない。

そんなこんなで、俺は水に対して凄まじいぐらいの恐怖を覚えるようになり、結果的に泳げなくなったと言うわけだ。

今では水を見ただけで失神するようなことはなくなったが、トラウマがかなり根強く残っているようで水深1メートル以上の水に近寄れない。いや、近づくことは出来るが水の中に入ることが出来ない。

だが、さっきもう一人の幼馴染が余計なことをしてくれたせいで

本当に近寄れなくなっている自分がいるのが目下の悩みだ。

それを遠まわしに愛華に言つと、最初は心配そうに聞いていた顔が段々と般若はんげんのようになっていったのは俺の気のせいだろう。あいつが戻ってきたらどうなるか分からないが、多分本気で血の雨が降るような事態になりかねないだろう。まあ、一応幼馴染だから助けるけど。

ちなみに、本当のことを言えば泳げないわけじゃない。緊急事態にはトラウマなんて気にしてられないし、俺のトラウマは『泳ぐこと』ではなく『離岸流』と『クラゲ』だからだ。だから、波のプールじゃなければ泳ぐことは出来るはず。

シヨック療法とか好きじゃないけど、このままだと仁あたりが「今年の夏はみんな海に行くぞ！」とか言い出した際に俺一人だけ泳げないと言つ憂うれき目に遭あつるのは目に見えてる。

「覚悟……決めるか……」

大丈夫。こんなの、大分前に海斗に地上四千メートルから強制ダイブをさせられた時に比べたら、なんてことは無いはず。あの時はパラシュートさえ付けてくれなかったし、本気に死ぬかと思った。

プールなんて命の危険があるはずも無いし、何かあつたら誰かしら助けてくれるだろう。監視員だっているし、何も問題は無い……はず。

いや、こんな時に弱気になるからいけないんだ。大丈夫。俺は泳げる。俺は泳げる俺は泳げる俺は……。

そんなことを考えながら、俺は愛華と一緒にウオーターライダーのところまで来ている。ずっとブツブツ呟つぶやいていた俺を見た名前も知らない同学年の生徒には軽く引かれたが、既に腹は決まってる

「龍馬大丈夫？ 顔真つ青だよ？」

ゴメン、やっぱり怖い。

俺らの順番まであと四組。一人で行く奴やカップルで行く奴らといるけど、俺と愛華はウオーターライダーの階段を上る際に管理員からカップル用の二人乗りの浮き輪のちゅうなもののを渡されたため、殆ど逃げ場

は無いような状況　って、浮き輪？

(そうだ、浮き輪があれば絶対に溺れることなんてねえじゃん！)
その時の俺は自分がいかにアレな発想をしているかなんて知る由も無かったが、その時の俺は相当にテンパってたと思ってほしい。そうじゃなきゃ、普通に浮き輪を使うなんて発想が出てくるはず無いし。

そんなこんなでテンションがナチュラルハイになってしまった俺の頭からはすでに水に対する恐怖心なんて欠片ほども消え去っていた。後になって思えば相当にどうかしていたとしか思えないが、とりあえず嫌な記憶はゴミ箱にポイ捨てして、脳の記録媒体の容量を広げた俺に怖いものなんて何も無い。

「次の方、どうぞー」

対に俺たちの番がやってきて、愛華を前に、俺が後ろに座る形でスタンバイした。

今俺が掴んでいる手すりを離せば、俺と愛華が乗った浮き輪(?)は水の流れに押されて滑り落ちていくことだろう。

だが、テンションがおかしなことになり始めた俺に怖いものなんて無い。いざ、未踏の地へ！

そして、俺は手すりから手を離した。

その瞬間、俺はウォーターライダーを選んだことを激しく後悔した。なぜなら、ウォーターライダーで流される様子は俺のトラウマである離岸流の状況に酷似していたからだ。

そして俺は叫んだ。俺の前で楽しそうに声をあげている愛華ととも。

「きゃあああああああ(笑)！」　愛華

「いやあああああああ(泣)！」　俺

その日から、俺の体がウォーターライダーを見るたびに震えるようになったのは別の話。多分そのうち語る時が来ると思う。

一章 二部

「死ぬかと思った……」

その後、俺は半分死人のように虚ろな目をしたままぐったりと浮き輪の上に乗っていて、偶然近くを通りかかった大和に二回目の救出をしてもらったのだった。

「無理するからだよ全く……ほれ、お茶」

「さんきゅ」

大和が差し出したお茶のペットボトルを受け取り、ゆっくりと喉に流し込んでいく。そのうち俺を苦しめていた吐き気もおさまり、ようやく一息つくことが出来た。

ちなみに、ここに愛華はいない。さっきまでずっと俺の看病をしていたが、大和が交代すると言い出し、俺らのクラスの委員長であり愛華のルームメイトの鬼灯灯ほおずきあかりが愛華を引っ張って行ったため今こには俺と大和しかない。

「それにしても、お前ってカナヅチだったんだな」

「正確には昔の出来事による精神的トラウマ外傷で離岸流りがんりゅうとクラゲが嫌いになってるだけなんだけどな」

大和の場合は暈した言い方をしても心の中まで見透かされているような気がするから極力嘘は言わないようにしている。まあ、俺の場合は嘘なんてあまり言わないけど。

「まあ、あんまり踏み込むのも俺のキャラじゃないし、根掘り歯掘り聞くのはやめとく」

「そうしてくれると助かる」

こういうとき、ルームメイトというのはとても楽だ。ある程度の意味疎通は会話をしなくても出来るし、ここまでなら踏み込んでいってというラインを掴めるから。

「じゃあ、俺はそろそろ行くけど、良いよな？」

「ああ。俺も回復したら愛華のとこ行くから」

俺がそう言うと、大和は再び水深十メートルのプールに向かって歩いていった。

そう言えば、この学院に編入してから三週間ぐらい経つけど、未だに知り合いが四人しかいないのはどういうことなんだろうか。いきなり愛華と仁に会って、大和とルームメイトになって、隣の席の委員長と愛華関係でそこそこに仲良くなって……

「なんか、俺の周りにいる奴ってキャラ濃すぎんな……」

だから普通の知り合いが出来ないのか。俺自身もかなり普通じゃないし。

ずっとプールの方を見てみると、体調もようやく落ち着いてきた。ちなみに俺の目の前のプールでは、数人の女子と悪乗りした男子が派手に水属性魔法や風属性魔法でプールに変化を作り出している。

そんな様子を微笑ましく見守りながら視線を周りに向けると、俺の眼に一人の女子が留まった。

髪は金髪、格好は当然のようにスク水（ただし、胸の部分が窮屈そうになっていて　マズイ。鼻血出そう）。それ以外の部分もバランスが取れていて、凄まじいほどのスタイルの良さを周りに見せつけ　ているわけじゃないけど、結構目を惹く。

そして、俺はそんな彼女に見覚えがあった。

パラソルの影でシートに座りながら優雅に読書をしている様子が多分なかなか様になっているその女子は、つい最近知り合ったばかりの同級生、エルザ「F」ディアマンテだ。イギリスの貴族の娘らしいが、俺はそこら辺の事情には詳しくないからエルザのことはあまり知らない。

ただ、最近をよくエルザの方から絡んでくる（言い方がちょっとアレだけど）から、赤の他人から友人（？）までランクアップしている。まあ、よく絡んでくると言っても、俺が図書室で勉強してるときに偶然会って話をするとか、学院内に多数存在するアリーナで魔法の特訓中に魔法について教えてもらうことがあるぐらいだけど。エルザの学年ランクは四位。俺が少し前にやったランキング戦で

五位になってからは、よくエルザに火属性魔法について教えてもらっている。火属性魔法に関してはエルザが一番凄いため、ためになることは多い。

ついでに、愛華は学年三位で大和は学年二位。もう一人の幼馴染の仁は学年一位だから、俺は葉盟学院高等部の二年生で五本の指に入る奴らと知り合ってることになる。相当に凄い状況だ。

そういえば、俺がここに編入してくる前に通っていた神流学園でも普通の知り合いいなかったな……。

（まあ、今はどうでもいいか）

どうせ夏休みに入ったら向こうの方に顔出さなきゃならないだろうし、今考えても無駄だ。風紀委員って言う仕事からも解放されたいし、今の俺を縛るものは何も無い。

そんなことを考えていると、丁度本を読み終わって顔を上げたエルザと目が合った。

相変わらず白人らしく真っ白な肌をしている。顔にはシミやそばかすなんて見当たらないし、切れ長な瞳が放つ眼光はとても鋭い。が、目の前に立ってるのが俺だと確認したのか、訝しむような視線から気の知れた友人へ向けるそれへと変わった。

「まあ、あなたでしたの」

「ん。まあな」

俺は返事をしながらエルザの隣のシートに腰掛ける。すると、俺の体を容赦なく照り付けていた太陽光がパラソルによって遮られ、若干だが涼しくなったように感じた。

「龍馬さんは泳がないんですの？」

何を話したらいいか考える間もなく、エルザが俺にそう聞いてきた。

それが普通の反応だっというのは分かっているんだけど、ここまで沢山の顔と名前が一致しない同級生に同じ事を聞かれ続けていたため、一瞬「またか」と思ってしまった。

「泳がないんじゃないかって泳げないの。泳げない人間からしたら水泳

の授業なんて地獄以外の何物でもないつてのに……」

「まあ……それはなんと云うか、ご愁傷様ですわね……」

エルザの返しに若干文法の間違ひがあるんじゃないかと思ったりもしたが、声には出さない。エルザは外人なんだし、上手く日本語が使えなくてもおかしくはないだろう。俺だって、時々トチ狂った発言をすることがあるし。

「エルザは？ 泳がないのか？」

「実は、わたくしも泳げないんですの」

意外なところで話の合う仲間が！ とか思ったけど、エルザの場合俺と同じようなことで泳げなくなっただけでは無いだろう。

「なんで？」

だが、そこで理由を尋ねる俺も相当残念な頭になってると自覚せざるを得ない。

多分だけど、エルザが泳げない理由は安易に想像がつく。大方、地中海辺りで家族とクルージングを楽しんでいる際に何らかの事故で船から転落。パニックになったせいでもともに泳ぐことが出来ずに溺れて、それがトラウマになって水に入るのが怖いとか、そういうことだろう。

ちなみに、律儀に答えてくれたエルザの言い分も、俺が予想したのと九割方一緒だった。一つだけ違ったのが、地中海ではなかったと言っところだけ。

「お互い苦労してるな……」

「まったくですわ……」

で、全く泳げないエルザは俺と同じように一度は頑張ってみたものの、やっぱり駄目で読書をするしかなくなり、現在に至るといっわけらしい。

「とは言え、このままここで無意味な時間を過ごすのもな……」

「けれど、わたくしたちにはどうすることも出来ないのですわ」

「それなんだよな……」

今の俺らの状況は、運動会の直前に不運にも足を骨折してしまい、

折角活躍できる数少ない場面に本部のテントで一人だけ仕方なく放送をしている　そんな状況だ。

ちなみに、去年の運動会は風紀委員の仕事に追われ、俺に対する個人的な恨みを持つ多数の法術使いと熾烈な戦いを繰り広げていたため、ろくな思い出にはならなかった。

その時俺が検挙した生徒は五十七人に上ったのはまた別の話。

「結局どうやっても泳げるようにはならないしなル・ムクリッパ」

水の上に立つことは出来るんだけど、俺の空間制御は水相手にはあんまり意味が無いし……。

「いつそのことプールごと吹き飛ばすか……」

こういう考えが素で出てくるぐらいに水泳が嫌いなのは分かってもらえると思う。俺にとつての嫌いなものなんて五本の指で数えられるぐらい少ないけど、嫌いの度合いが凄まじいから簡単に克服は出来ない。山芋とか。

「結局、ここで授業が終わるまでじっとしてるしか無いのか……」

それはそれで鬱になりそうな話だが、出来ることが何も無い以上じっとしている以外の選択肢が選べない。これで近くにアリーナとかあれば魔法の練習に時間を費やすことも出来るのに……あ、いいこと思いついた。

「来たれ」

俺はアーティファクトのカードを片手に始動キーを口にし、自分のアーティファクト（魔導具）を実体化させる。すると、俺の手元には古ぼけた一冊の魔導書、『造物主の掟』が姿を現した。「カード・オブ・ザ・ライフメイカー」

このアーティファクトは、描いた物語を忠実に再現すると言う恐ろしいものだが、以前並行世界に住む自分の分身から情報を集めた時、それ以外にもかなり多くの能力を秘めていることが分かった。

一つ目は、形を自由自在に変えられるということ。

はつきりとしたイメージが必要だから何とも言えないけど、俺は想像力や考える力だけは突出してるからそこら辺は問題ない。で、色々と形を変えるって言うことはつまり、どんな武器としても使

えるということだ。

ただ、造物主の掟は闇属性　俺らが使う魔法には八種類あつて、火、水、風、土、雷、氷、光、闇の八種類から自分の魔力特性に合った属性の魔法だけが使える　だから、武器として使う場合に予想外の副作用が出ることもある。

今のところは怖いから何もしてないけど。

二つ目。これはもう世界のバランスが崩壊するんじゃないかと思う　いや、完全に崩壊するけど、世界のリメイク機能だ。

簡単に言っちゃえば、俺がこの世界の神様になれるということだ。現実から離れすぎて最早ぐうの音も出ないよ。

ただ、造物主の掟を使う際に気をつけなければならないことがある。それが、闇の刻印だ。

学年ランキング戦が終わり、一時的に入院していた病院からも退院し、部屋に戻ってようやく普通に風呂に入れると思つて服を脱いだ時にそれに気付いた。俺の右肩を中心に、刺青のようなものが広がっていたのだ。

俺は基本的にそういうものはやらないようにしている。自分の体に何かをするという発想自体がまず有り得ないし、そんなものに金をかけるなら俺は自分の研究に使う。趣味の一種だから誰に止められようか。

話がそれた。とりあえず、そういうことがあつたから俺はあまり造物主の掟を使えない。この刻印が全身に回ると死ぬみたいだし。

それが分かつていて、どうしてこれを出したのかには理由がある。それは、魔法の勉強のためだ。

これは一応闇の魔導書だから、闇属性魔法に関する情報は一通り揃っている。葉盟学院では闇属性魔法を教えてくれる人がいないため、全部独学でやらないといけないのだ。

二週間後に迫った期末テストの魔法の実演では、それぞれの魔力特性に合った属性の魔法を見せなければならぬから、俺はかなりの悪条件の中でやらないといけない。

幸い攻撃魔法だけは自分で考えて作ってあるから良いんだけど、問題なのは防御魔法と強化、弱体化魔法だ。俺は普段から防御魔法は水属性の『絶対防御の盾』^{ミストラル・シールド}を多用しているから、それに関してはもう完璧なのだが、闇属性の防御魔法といたら、攻撃してきた相手を確実に殺す魔法とか、防御した瞬間に大爆発を起こすものとかピーキーなものが多すぎる。中にはまともなものもあつたりするが……ごめん、説明できない。

強化魔法はかなり数が少なく、しかも自分の精神を一時的に解放して『狂戦士』^{バサカー}のようになってしまつようなものが大半だからあまり使いたくない。

弱体化魔法も酷いもので、呪いなんかは当たり前。それ以外でも相手の五感を奪うものとか、体が端っこから空気に溶けていくように錯覚させるものとか、精神崩壊を起こすようなものとか、口クなものが一つも無い。

だから、期末テストはかなり苦戦を強いられることだろう。

まあ、ただでさえ暗澹としてる気分の時にこんなやつたら自分の精神が変な具合になるかもしれない。とりあえず、これは後にしよう。

「戻れ」

俺がアーティファクトをしまったためのキーを口にすると、造物主の掟は再びカードに戻った。

「仕方ない。寝るか」

今日はほとんど自由行動みたいなものだし、昼飯の時間までだったら寝てもいいだろ。どうせそのくらいの時間になつたら愛華が来るだろうし。

俺は自分の腕を枕にして、昼までの二時間ちよつとを寝て過ごすことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3814t/>

名無き世界と未知の世界（仮）？

2011年5月23日09時10分発行